

中村とうようさん

僕自身は芸術祭なんてあまり好きじゃないし、山城組が芸術祭に参加することにも大して意味があるとは思ってないけれども、結果的にはブルガリア民族合唱成功十周年の区切りが、芸術祭参加ということでもいいっそうはつきりしたと思う。また、ライブ・レコーディングということもあって、みんな一生懸命歌っていて、気合が入ってるのってるっていう感じをすごくうけた。特にブルガリアが一番素晴らしい出来だった。そのことはレコードにもよく表われていると思う。

レコードの構成については、僕は一枚にしかかった。一枚にしてなるべく多くの人に買ってもらう方がいいと思って、当初は代表的な曲だけ選ぶ予定でいたが、「恐山」をB面全部に入れると他の曲が入らない。また、あれだけ多彩なプログラムを2つの面に押し込んでしまうと、ごちゃごちゃすぎるんじゃないかということで二枚組にした。A面とB面が特にいい出来だと思う。

音質的にも、技術の方によくやっていただいたおかげで、ライブとして第一級といえるものになった。曲目からいっても、演奏の質からいっても、山城組の十年間の集約にふさわしいものができた。

タイトルの「芸能山城組ライブ」は、僕があればいいといったもの。変に凝るより単刀直入でわかりやすく、その名のズバリのタイトルがいいと思った

から。

当日のコンサートでは小泉先生が司会をなさって、いろいろいいお話をしてくださった。レコードの場合、音楽ならくり返し聴くうちに親しみがわいて、聴くごとによくなるってことがあるけど、ナレーションってのはどんなにいいナレーションでも、何度も聴くうちにどうしてもシラケちゃう。同じことを何度も繰り返ししゃべってるのを聞くのは余り面白いものじゃないのと同じ。そういうこともあって、レコードの場合はどうしてもナレーションをカットせざるを得なくて、小泉先生の話はレコードでは最小限度にとどめさせていただいた。その点は小泉先生及び小泉ファンの方々には申し訳なかったと思う。

前作「黄金鱗讃揚」のダイレクト・カッティングがライブじゃないけど一発勝負というところで条件的にライブに近かったわけで、ライブの練習になったというところも、スタジオ録音からダイレクト・カッティングを経験してそれからライブということ、結果的にはよかった。

ライブのメリットとしては、真剣勝負で一発にかけるところがリアリティとなるみたいなことで、それが今度のレコードの場合プラスになって出たとと思う。失敗するとメタメタになるが、うまくいってよかった。

プロデューサーの仕事として、大変いいものができたと思う。レコーディング・アーティストとしては、山城組は第一期を終えたという感じ。これをあらたな出発点として、さらに飛躍していただきたい。期待している。